

幣で五十円くれた。この方は日本大学在学中で夏休みで帰っていた。東京へ行きたいと言っていた。帰りに大豆とトーキビを乾燥したのをくれた。これを嚙んで水を飲むから歩くと腹の中からゴボンゴボンと聞こえた。

九月二十一日、夕暮れに空銃を持った人と出会った。京城へ行く道を聞いたら、今日は遅いから私の家に泊まって明朝早く行けば昼頃までに京城に着く。この辺は危険はない昨日ソ連兵が帰った。この家で夕食の際主人も一緒だった。食事中の話ではここが三十八度線近くという。今までもどこも分からず歩いて来た。明日京城へと思ったら、その道順を何回も聞き返し頭の中に焼き付かせて床に入ったが、なかなか眠られなかった。翌朝早く起きた。この家の主人の従兄弟が買い物に行くので途中で一緒に後について行く。

九月二十三日、無事に京城に着くことが出来た。この家の主人は早稲田大学を卒業し就職が決まったので一寸実家に帰ったときで東京へ戻ると言っていた。この脱出を振り返って九月八日から九月二十三日まで殆ど水ばかり飲んで逃げ歩いた。人家から離れた農家の人は泊めて

もくれたし食べさせてもくれた。途中反日派の人に捕らえられ、親日派の人に釈放されて来たこともあった。あの威風で乳飲み子を背負った米粒拾いの婦人の困却の姿、九月四日清津方面より約三百人の難民等の苦難の姿を思い出す。皆んな女性が頑張っていた。母は強し。大勢の子供達や老人が帰れたのも女性の力であった。

この記録に苦勞した女性の声を多く載せて後世に残して下さい。

満州国の日本人避難民救出について

北海道 湯沢 昌志

昭和二十一年六月十日、通河県、方直県方面に難民が数百人居住しているとの情報が日本人ハルビン居留民会にはいつて参りましたので幹部が集まり協議の結果、現地にいたことのある人が一番良いのではないかということになり私と満拓公社通河出張所に務めておりました八木照義さんの二人に白羽の矢が立ち、難民救出のため北

安省―佳木斯經由で通河、方正方面にはいることにしました。調査に先立ってハルビン八路軍指令部より通河、方正方面難民救出旅行証明証を頂きました。そのため調査先の現地地区指令部全部に手配をして頂きました。

二十一年六月十三日北安經由で、十四日佳木斯駅に八時三十分頃安着致しましたところ駅に佳木斯地区司令部より迎えの車が参りました。十分ぐらゐで司令部に着き副官が参りまして遅くなりましたので、明朝伺いますと言つて帰つて行きました。翌日九時司令室に行き司令官に残留抑留者捕虜の釈放方を請願しましたところ心よく引き受けて頂きました。司令官の言葉ではソ連軍がしたことであり中国としては関係のないことで早急に釈放しましょうと約束してくれました。捕虜総数三百余人で、湯原県、依蘭県、通河県、方正県の関係者で約束通り数日後に釈放されました。私達は二、三日後に八路軍の幹部の見送りを受け船で一路通河に下りました。六月十七日、通河港に着くと同時に早速八路軍司令部を訪れたところ、ハルビン指令部より連絡がありましたと心よく迎えてくれました。司令官に面接、通河県、方正県にお世

話になっております難民を迎えに参りましたと挨拶を致しましたところ、ハルビン指令部よりも連絡がありましたので、出来る限りのお手伝いをしますと心よく引き受けてくれ、通河県、方正県に連絡をとり係員を付けていただき翌日難民救出に当たりました。八木さんは方正県方面、私は通河県方面担当ですが、一人で現地開拓団に行くことだけは危険だから行かないで下さいと注意がありました。各県の係員が一緒になり、各部落からの呼び出しにあたってくれました。私も通河県内で開拓団担当をしていた関係で、長野県から入植された、張家屯開拓団、上久堅開拓団、小古洞開拓団、第九次入植瑪瑙河東筑摩開拓団、大古洞開拓団、山形県より大平山開拓団、九州より入植の漂河開拓団、大通河開拓団、新瀉県より入植の檳榔開拓団それぞれの入植地の跡地を参考までに見ておきたいと思ひ係官に申出ましたが、危険なので行かない方がよいと言われ、目的達成出来なかつたことが残念でなりませんでした。

六月二十日方正県に行かれた八木さんからの電話連絡があり、県の係官のお骨折りで部落から婦女子ばかり帰

国希望者二百六十人現地を離れることに決まりましたから二十一日方正を離れますとの連絡があり、通河での宿泊準備をお願いする。通河県でも各部落からの婦女子六十人中には、長野県から終戦まぎわ十余人勤労奉仕隊の娘さん達と一般人五十人通河に集まりましたので日本に引揚げが決まったことを伝えると泣いてよるこぶものも数多くおりましたが、中には日本内地の不安を感じて帰りたくないという人もおりました。また子供が満人宅にいたと言った人もおり、全員救出困難をきわめましたので、帰りたいと言う人達二百余人で現地を離れることに決定、司令部に報告船の借上げを依頼、一路ハルビンに向かって出発、途中木蘭港より三十余人是非とたのまれ同船して参りました。ハルビン港にはハルビン日本居留民会から四、五人の係員の出迎えを受けそれぞれ難民收容所に案内を頂きました。

七月始め頃から引揚げが始まり、日本本土めざして皆さんに帰っていただきました。

一般孤児については救出することかできなく残念ではありませんでした。私と八木さんは八路軍司令部から帰ら

ないで日本人救出に働いてくれと言われましたが、最終列車で逃げるようにハルビンを後にしました。

他人の子を連れ帰る、悪戦苦闘

岩手県 藤川 タマオ

私の夫は昭和二十年八月一日に、満州の現地で応召、第二六〇〇部隊にはいりました。八月九日ソ連軍の満州侵攻がはじまりました。八か月の子を背に、三歳の長女をつれ、私達の会社の家族全員が避難、新京駅前の鉄道省の玄関で二日二晩の不安な日を過ごしました。八月十五日十二時、終戦の放送が流されました。加えて、ロシア兵が南下しているということも伝えられました。私たちは南下する列車に乗ることになり、そのために、二、三日駅の改札口に並びました。手には持てるだけの食べ物、カンパン、いり米、かん詰などを大ぶろしきにいれました。下着類も入れました。順番を待ちに待って、さて、いよいよ乗ることになり、新京駅の改札口から、何